

前漢長安城における空間形成のメカニズム

肖 愛 玲
堀井 裕之 訳

1. はじめに

アンリ・ルフェーヴル (Henri Lefebvre) の都市空間社会学の理論は都市の空間過程と社会過程とを結合させて、都市研究を啓発して都市空間の変化の背後にある権力の作用と制度の力量を深く掘り下げ、都市研究の中心問題が人工的空間の構成を解釈することであり、特に資本主義生産方式が内包する矛盾をどのように反映し、表現し、バランスを取り、或いは影響したのかを提示することにある。そして、都市空間社会学は都市の社会変遷の現実を理解し分析するための独特な理論と視角を提供した。空間社会学では都市空間に対する認識方法は二種類がある。一つは権力の動きにより都市空間を理解することで、これは上から下を見て社会を理解する方法である。もう一つは日常生活より都市空間を理解することで、これは下より上を見て都市空間を認識する方法である。すなわち、ある空間がどのように生産されたか、どのような理論に基づいて生み出されたのかを研究することを通して、空間を使用する人々が空間の本質的構造と政治権力の目標に対抗できることを研究するものである。

中国古代の都市研究の領域で都市空間の発展と変遷を扱った系統的な研究成果は多くはないが、最も直接に関係するものに李久昌『国家・空間与社会—古代洛陽都城空間演變研究』^[1]、魯西奇の『空間与権力：中国古代城市形態与空間結構的政治文化内涵』^[2]及び私の博士論文『西漢城市地理研究』^[3]がある。李久昌先生は「国家-空間-社会」の視角より中国で最早期の王朝の都城の地に何故「河洛之間」が選択されたのか、都城内の政治中枢部の形成理念、都城社会の系統的制御、都城の経済生活の管理から都城空間の形成、発展、変遷の法則要因について探求し、古都洛陽空間の発展と変化に内在する構造について検討を加えた。私の学位論文では実証的な歴史研究を理論の基礎として、特に前漢時代の全国の県級及びそれ以上の都市空間の発展過程を系統的に整理することに基づき、上より下を見る視角を具体的な歴史事件と結合させて前漢時代の中央と地方権力の関係の下での都市体系の発展と変化

の特徴について提示した。一方、魯先生は城市・城牆から区分内外の機能を手掛かりに中国古代都市の形態と空間構成中の政治文化の性質を探究した。三者を比較して言えば、理論の運用面については、なお、すべて試論的な探求段階にあり、より一層の研究を継続する必要がある。

中国古代の都城は中華民族文化の縮図であり、時代ごとの都城はその時代の文明の最高到達点を代表しており、中国歴史伝統文化の遺伝子の運び手である。古都の空間は、自然に基づく空間と人文社会・文化・精神に基づく空間を包括している。この都城空間の範囲はすべて唯一確定できるものではないので、城壁に囲まれた範囲に限定すべきものではなく、その周辺地区の空間との境界線は相対的なもので、研究内容を根拠にして、改めて都城研究の境界を確定する必要がある。近年来、私個人は漢唐長安城の研究に尽力している。隋唐長安城の研究と比較すると、前漢長安城内の空間配置は明確ではなく、その研究する範囲も、現在、残存している遺跡の城壁の範囲内に限定することは、決して許されるべきものではない。

2. 都城空間の位置と選択：長安と洛陽の間，長安と咸陽・豊鎬

都城を建設する時に最初に直面する問題は都城の位置を選定することで、漢五年（前202年）、高祖劉邦は徹底的に項羽を打ち破ったのち、漢王朝が真っ先に解決しなければならなかったのは、都城の場所を選定する問題だったのである。高祖と彼の大部分の追従者は山東地区の出身であり、これらの人々は李開元氏の言う軍功受益階層の中核であったので^[4]、皆、都を洛陽に定めて、錦を着て故郷に帰る便を図ろうと願った。しかしながら、この頃の前漢王朝は危険に絶え間なく直面しており、国内の情勢は不安定で（異性諸侯や大軍を掌握している将帥が新王朝の安全を脅かしていた）、国外では虎視眈眈とした匈奴がおり（匈奴は既に秦始皇帝が奪った領土をすべて回復していた）、故にこの時期の都城に求められたのは地形が險要で、且つ退いて守ることが自在な地域であった。最終的に、婁敬・張良の建議が前漢王朝の都城の選択に大きな影響を与えて、高祖は決定を下して即刻関中へ行幸し^[5]、およそ複数の協議と調査を経て、その年の閏九月に秦の離宮興樂宮の跡地に新たな宮殿を造営することを決断したのである。

史書では婁敬・張良が長安と洛陽の優劣を論述したことに対して大書特書しており、表面上は漢と周の徳行の比較ではあるが、実際のところは洛陽と長安（咸陽）地域の地勢の比較であった。周の徳行の発祥地にして周礼と周文化が形成し発展した中心地域は、関中の豊鎬と岐雍の間であり、その歴史や文化は深く根付いていた。この点については、周原の周文化の考古発掘の成果をもって証明することができる。従って、徳行の比較は仮託であって、ま

さに議論の原因は別にあり、それは劉邦が秦の二世で滅んだ旧都に都を置くことを願わなかった原因の一つなのかもしれない。

前漢王朝の都城は最終的に関中の地を選択したが、その理由は、漢王時代の劉邦が関中であって非常に強い群衆の支持基盤があり、深く秦の旧民の信頼を得ていたからである。漢元年（前206年）十月、沛公劉邦は武関を通過して関中に進入し、軹道で秦王子嬰の投降を受け入れ、秦の宝物・財物・府庫を封印し、丞相府・図書戸籍・文書をすべて接收し、快適な寝殿を離れて覇上に設営して項羽を待ち、その重厚な君子の一面を現した。これと同時に、劉邦はまた関中の父老と法三章を約し、合わせて人を県・郷・邑に派遣して規約を民に宣告し、父老・郷親たちが送った牛・羊・酒食を拒絶し、当地の人民の支持を最終的に獲得したが、これは人民が劉邦の秦王とならないことを恐れたことのみならず、彼の民を子のように愛し、公を奉じて法を守るという潜在的な資質を暗示している。しかしながら、項羽の背信と違約によって、彼は已むを得ず自身の軍隊のみを率いて危険と困難がつきまとう子午道より山々を越えて南鄭に至り漢王となったことは、強大な勢力に直面して隠忍自重を強いられたことを反映している。且つその軍隊を率いて栈道を焼き払ってから隠密に陳倉に進出するまでは一ヶ月（漢元年四月～五月）に過ぎず、それから同年八月には関中の三秦を平定したことは、劉邦が秦の旧民の支持を得たことと決して無関係ではなかった。三ヶ月後（漢二年十一月）、臨時の都城を秦の旧都櫟陽に置いた。さらに三ヶ月後（漢二年二月）、秦の社稷を排除して漢家の社稷を建てた（その遺跡は漢長安城南郊の礼制建築遺址内の西側建築遺址の一つ）。その年の六月、劉盈を太子に立てて櫟陽で監国させた。これと同時に、秦の祭天儀礼を改善して、黒帝祠（北時）を立て、祠官に天地・四方・上帝・山川等々を祭祀させ、積極的に前線で戦闘をするために後方の安定を築いた。以上に述べた種々の点は、すべて高祖劉邦が関中の地に都を置こうとした計画を裏付けるように思えるが、しかしながら事実はそのようではない。少なくとも長樂宮を修築する以前は、彼の内心では一貫して洛陽に都を置くつもりであった。何故ならば、まさに『史記』には「高祖欲長都雒陽。」と記載されているからである^[6]。

遷都後にも劉邦は洛陽への愛着を行動に現した。その在位期間に複数回、且つ長時間にわたって洛陽に行幸しているのである。漢五年（前202年）九月、高祖は洛陽に到達した。六年（前201年）十二月、帰還して洛陽に到達した。七年（前200年）夏四月、洛陽に行幸した。八年（前199年）春三月、洛陽に行幸した。八年（前199年）秋九月、洛陽より長安に帰還した。九年（前198年）十二月、洛陽に行幸した。九年（前198年）二月、洛陽より長安に帰還した。十一年（前196年）春正月、馬邑より洛陽に行幸した。夏四月、洛陽より長安に帰還した。このように6回にわたり洛陽に行幸し、そのうち4回は長安を出発して洛陽よ

り帰るというもので、3回も洛陽に2~6ヶ月の長期わたり常駐している。そのうえ、漢五年九月の行幸は、その年の五月に洛陽より長安へ遷都のために行幸した直後に再び洛陽に帰還したというものであった。これによって洛陽が劉邦の心中においてどれだけ重要な地位を占めていたのかを知ることができるのである。

長安と洛陽の比較は大区域間の優劣で、そして長安と咸陽・豊鎬の優劣は小区域間の空間の発展の状況によって決定された。西周の文王・武王が岐山の陽より澧水兩岸に遷都したとと、秦国が隴西より東に一直線上に移動した（秦は八度に渡り遷都した）目的は一致しており、始皇帝三十五年、秦都咸陽の人口が過多となり、古い宮殿が狭小で豊鎬の区域に帝王の都を置くべきことを理由にして、渭南上林苑に建朝宮を造営したというが、この理由はやや牽強である。何故ならばこれより早い段階で、秦が渭南に宮廟^[7]・台閣・復道・甬道・横橋^[8]を造営して渭北の咸陽宮と連結させているからである。それ故にある学者は秦都が法天象地の思想を踏まえて計画されたとしている。周・秦が政治の中心を東へ移そうとする傾向は非常に顕著で、それは戦争する対象がすべて函谷関以東に分布することと関係していた。

そのほか、漢五年五月に西方の関中に都を定めてより、九月に最終的に長樂宮を造営するまでの過程について、考察しなければなるまい。漢元年の蕭何による秦丞相府所蔵の図書・文書の接収、三秦の統一、太子劉盈が櫟陽を留守となったこと、とりわけ蕭何が絶えず前線に兵糧を送り続けたことより見ると、漢は関中の山川・塬（台地）・池・湿地帯などの地形や周秦の歴史文化などを非常に理解しており、これに付け加えて項羽が咸陽を破壊する暴挙を目の当たりにしていた。言わば、渭水南岸の長樂宮を選んで新都造営をすることは、秦都が発展した路線を継承する第一工程であると言え、漢が秦の政治・文化を継承するという「漢承秦制」路線の重要な項目とすべきものである。項羽の炎は渭北の咸陽宮と旧六国を模倣した宮室群を焼き尽くしたが、渭南の阿房宮などの残りの宮室もまた焼き打ちを免れることができなかった。それ故、漢二年の段階では、臨時の首都を秦献公二年（前343年）に造営された櫟陽城に選択するしかなく、漢五年になって正式に首都の候補地を選択する際は、改めて遠大な計画を立てざるを得なかったのである。

上述の歴史事実より、前漢初年の都を定める過程では洛陽と長安の間、豊鎬・咸陽の間の空間属性の差異が現れたことは、秦漢の社会文化の真実が反映されたと言えることができる。長安に都を定めたのは首都防衛に要因があるとともに、同時に東進の政治的意図も含んでいるのである。

3. 前漢長安都市空間の発展過程の復元

都城は帝国権力の中心の所在地であり、帝国の政治権力と秩序は社会・政治・経済・文化及び軍事闘争の情勢に従って、絶えず調整と再建がなされるので、都城空間の構成要素に表現されるものは即ち新たな都市空間秩序の形成と再構成である。従って、都城空間の形成過程はその社会・政治・経済・文化の一樣でない発展段階の直感的表現である。史実の分析を通して、前漢の長安城の空間の変遷過程の主要な部分を述べると、以下のような特徴がある。

(一) 長安遷都以前の造営

前漢が長楽宮を建造する前、すでに以下の如く都城要素のある幾つかの建築を陸続と完成もしくは建設中であった。以下に述べる。

高祖二年（前205年）二月、民に秦の社稷を撤去させて漢の社稷を建てた。これは漢王が秦の土地と人民を得たことを立証している。しかしながら、当時は官社のみで官稷を立てていなかった。平帝の元始五年（5年）夏、安漢公王莽が上奏して「官稷」を立て、史書によると「以夏禹配食官社，后稷配食官稷，稷種穀樹。徐州牧歲貢五色土各一斗。」とある^[9]。

漢は秦の祭天の権力を奪い拡張発展させた。史書には「帝王之事莫大乎承天之序，承天之序莫重於郊祀，故聖王尽心極慮以建其制。」^[10]とある。漢二年（前205年）六月、高祖劉邦は北時を立て、黒帝を祀った。また祠官をして天地・四方・上帝・山川を祀らせ、時を以てこれを祀った。当時の社会は依然として動乱の渦中にあり、天子自ら祭祀を行っていなかった。文帝十四年（前166年）になって詔を下して郊祭の祭品を増やし^[11]、その年の夏四月、文帝自ら雍郊の五時を見た。これは前漢帝王の初めての五時の親祭で、同年、文帝は渭水北岸に渭陽五帝廟を建てた^[12]。翌年夏四月、文帝自ら覇渭之会（訳者注、覇水と渭水の合流地点）を拝礼し、郊の祭祀をもって渭陽の五帝にまみえた。その後、文帝は五帝壇を建てた^[13]。文帝は後元元年以降、渭陽・長門の五帝廟の祠官に管理と定期的祭祀を行わせただけで、本人は再び自ら祭祀することがなかった。景帝の在位時はたった一回五時の祭祀が記載されるのみで、それは景帝中元六年（前144年）冬十月のことであった。

武帝は鬼人の祭祀を好んだが、天地を郊祀することについては、それより一層楽しんで倦むことはなかった。元光二年（前133年）冬十月に、彼は初めて雍で五時を祀ったが、それ以降、三年ごとに郊祀を営むことを定めた。それのみならず、方士の建議を受け入れて、太祝に泰一祠を長安の東南郊（隋唐長安城の居徳坊南隅に位置し、依然として唐代の建築遺址の基礎が比較的残されている）に立てて、三一・黄帝を泰一壇の傍らに祀った^[14]。元鼎四年（前113年）十一月に河東汾陰の睢（訳者注、汾陰県治が置かれた黄河東岸の台地）の上

に后土祠を建立し、元鼎五年（前112年）十一月に甘泉に泰時を設置した後に郊祀の礼を確定させ、甘泉で太一を祀るのに乾位（訳者注、長安の西北）に就かせ、后土を汾陰に祭るのに、汾水のほとりの沢中に方丘を築かせた。

成帝の建始元年（前32年）、甘泉の泰時と河東の後土を長安の北郊に移し、永始元年（前16年）三月に、再び甘泉・河東の祠を復活させた。綏和二年（前7年）、再び長安の南北郊で天地を祭祀した。そして、哀帝建平三年（前4年）に甘泉・汾陰での天地の祭祀を復活させた。平帝元始五年（5年）、また長安の南北郊に天地を祭祀した。このようにして三十年余の間、天地の祠は前後五回場所を移したのである^[15]。

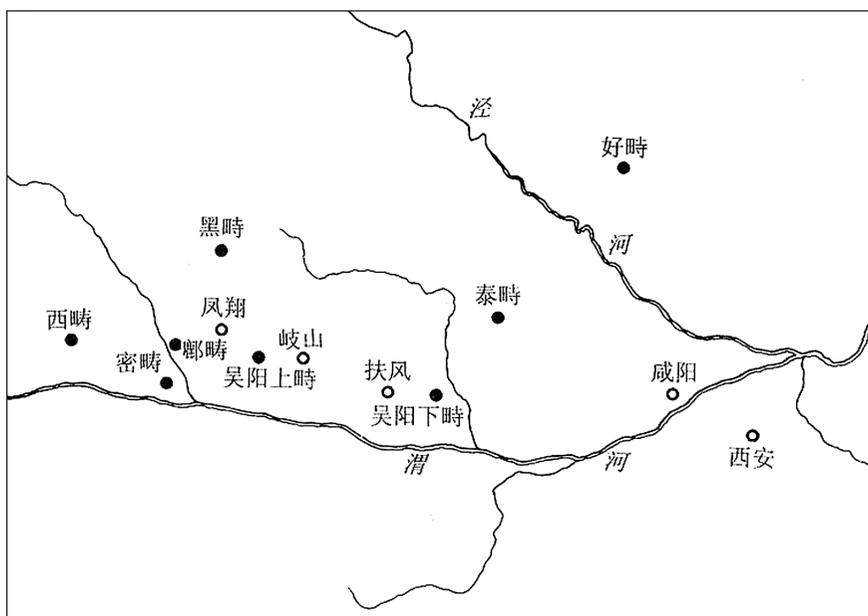


図1 秦漢時期における関中の諸時の分布図

(地図出典：姜波『漢唐都城礼制建築研究』図2、北京、文物出版社、2003年3月)

王莽の居攝元年（6年）正月、史料によると「祀上帝於南郊（上帝を南郊に祀らしむ）」^[16]とある。この現象は、天地を郊祀する地が徐々に神聖かつ深奥の地である雍地・甘泉から都城近郊の地に遷移する情勢にあり、人間の力がもはや天神地祇の制御を完全に受けるものではなく改変すらできることを表している。この事は人々の自然に対する認識能力が向上したことを体現しているのである。以降、天地を都城南北の郊外で祭祀することが定制となった。

郊祀の地点を遷徙したのと同時に、漢平帝の元始五年（5年）に、本来は雍地に祀られていたその他の諸神祠を分類して、漢長安城及城内の未位（未位は西南の南寄りの方角を指す、

未は地支の一)に移転させた。史料には、

分群神以類相従為五部，兆天^未之別神。中央帝黄靈后土時及日廟・北辰・北斗・填星・中宿中宮於長安城之未^未兆。東方帝太昊青靈勾芒時及^震公・風伯廟・歳星・東宿東宮於東郊兆。南方炎帝赤靈祝融時及熒惑星・南宿南宮於南郊兆。西方帝少皞白靈蓐收時及太白星・西宿西宮於西郊兆。北方帝顓頊黑靈玄冥時及月廟・雨師廟・辰星・北宿北宮於北郊兆^[17]。

とある。

天地と諸神祠を郊祀する場所を都城の遠隔地から近郊の空間に移転すること、及び宗廟を都城内より皇帝陵の付近に移すことなどの位置の変化は、漢代の政治・社会と文化思想の分野の巨大な変化を表している。長安における都市空間変化の原因を更に複雑なものとしてい

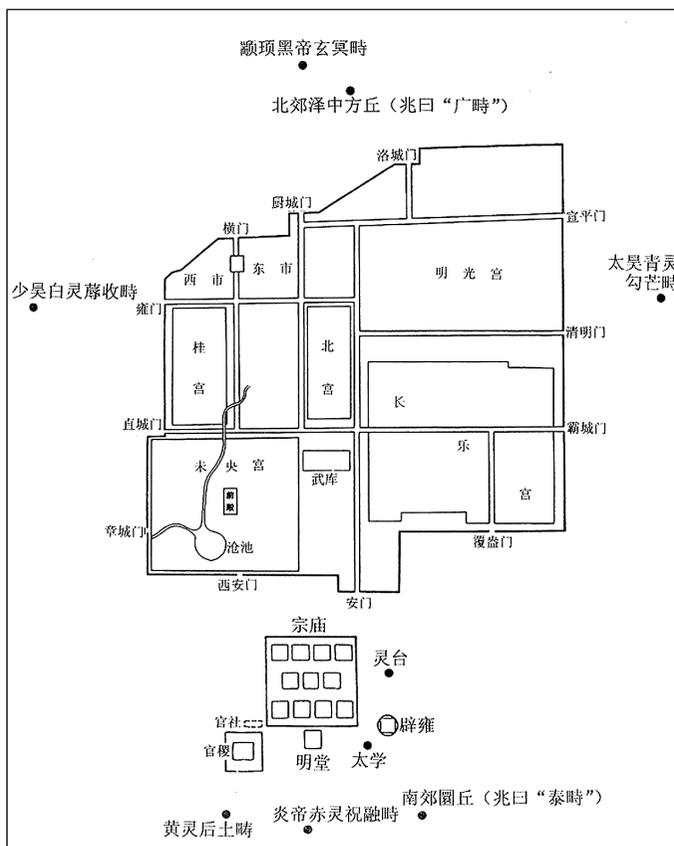


図2 前漢晩期における長安城礼制建築の配置図

(地図出典：姜波『漢唐都城礼制建築研究』図3，北京，文物出版社，2003年3月)

るのである。

（二）定都後の都城の建造

（1）宮城

漢長樂宮は漢五年九月より修築をはじめ七年十月以前に完成した。このことをめぐって、幾人かの学者の間で『史記』・『漢書』の記載を根拠にした論争が展開したが、皆等しくある問題について注意を払っていないのである。叔孫通が長樂宮で朝儀（訳者注、大朝会の儀礼）を予行演習したのが七年十月のことで、その席上で農民皇帝劉邦は、「吾迺今日知為皇帝之貴也。」と感慨を述べた。その後、劉邦は兵を率いて太原に赴いて匈奴と交戦し、長安城内は未央宮の建造を開始し、翌年二月に劉邦が帰還した時に、まさしく壮麗で堂々とした未央宮を目の当たりにしたのであり、その時、既に東闕・北闕・武庫・太倉が完成していたのである。宮室を「非壯麗無以重威、且無令後世有以加也。」の理念の下に劉邦は喜んで都城を長安城に移した。漢未央宮は八年末に完成し、九年冬十月に大朝会を実行した。以上の考証過程については別稿で論じる。

当然、宮城の主要建築が完成したのと同じくして、並びにその他の部分の建築の工程も完全に結束したが、正しく現代の都市建築と同じく、不断に都城を改善する過程にあった。大朝会の後も未央宮の建設は停止しておらず、文献には文帝末年以前の宮殿建築について記載がないものの、文帝時代には未央宮には前殿・曲台・漸台・宣室・温室・承明などの宮殿が既にあり、後に高門・武台・麒麟・鳳凰・白虎・玉堂・金華などの宮殿を増築している^[18]。武帝の元鼎二年（前115年）春に柏梁台^[19]・銅柱・承露仙人掌^[20]を建てた。哀帝の時代にもまた皇后と居住する椒房殿に相当する椒風殿^[21]を建てた。

長安城内のその他の宮殿で、高祖の時に修築した北宮^[22]は、武帝の時代になって重修されている。北宮には神仙宮・寿宮^[23]・太子宮などがあり、各宮は全て紫房があり復道をもって相互に連結されていた。桂宮・明光宮は武帝のために造営され、城西の建章宮は武帝太初元年（前104年）に建てられた。漢の甘泉宮は秦の林光宮と甘泉宮に基づいて造営されたものであり、武帝元鼎五年（前112年）十一月に泰畤を設置した後に更に拡張した。甘泉宮は前漢中期の祭天・冬至・諸侯朝会・外国の賓客の宴・郡国上計などの幾つかの国家の重大行事・儀礼・会計事務を行う中心地となり、重要な歴史事件の発生地として、長樂・未央に次ぐ第三の大宮殿となった^[24]。武帝が長安城の外で政治を行うための宮殿となったのである。

長安城の諸宮城の間は相互に復道で連結しており、一日では周回することができなかった。しかしながら、この事と、始皇帝の時に咸陽の周辺二百里内に宮觀二百七十があり復道・甬

道と連結していた状況とは、比較することが難しい。漢長安城内の最初期の復道は恵帝の修築に始まり、復道は武庫の南にあり、高廟・高寝を俯瞰することができた^[25]。

(2) 宗廟・陵廟・帝陵

中国の古代において、宗廟は先祖の祭祀を挙げる場所となっただけでなく、王朝の統治を世襲することを象徴したものであった。国家の宗廟は郊祀・社稷と同様のものなので、国家儀礼においては重要な地位を占めた。宗廟の設置は国家の統治思想、政治経済の現実の諸要素の制約と影響を受けた。『礼記』曲礼には「君子将宮室，宗廟為先。廡庫為次，居室為後。」とある。『墨子』明鬼には「昔者虞夏商周三代之聖王，其始建国營都，必擇国之正壇，治以為宗廟。」とある。目下掌握した文献より見れば高祖の廟（高廟と略称）が宗廟であった。漢初、功臣を籠絡するために高祖八年に始めて論功行賞を行い、143名の諸侯と封爵の誓いと丹書白馬の盟を行い、十八侯の序列を定めた。高后二年（前186年）、又、丞相陳平に下した詔勅には「尽差列侯之功，録弟下竟，臧諸宗廟，副在有司。」と述べられている^[26]。『漢書』卷三、高后紀第三には、この時の列侯功臣の序列に関する評定の報告には「臧于高廟」と明言されており、これは漢初に高廟が存在しただけでなく、重要文書を保管する場所であったことを説明する。このことにより、宣帝時代に「開廟臧，覽旧籍（廟臧を開き，旧籍を覽る）」機会があり^[27]民間の高祖の功臣の末裔を尋ねて、断絶した諸侯の位を継承させることができた。

高祖の廟は彼の死後のみならず、在世時にも使用された。『漢書』卷二十二、礼楽志第二には、

高祖時，叔孫通因秦樂制宗廟樂。大祝迎神于廟門，奏『嘉至』，猶古降神之樂也。皇帝入廟門，奏『永至』，以為行步之節，猶古『采薺』・『肆夏』也。乾豆上，奏『登歌』，独上歌，不以管弦乱人声，欲在位者遍聞之，猶古『清廟』之歌也。『登歌』再終，下奏『休成』之樂，美神明既饗也。皇帝就酒東廂，座定，奏『永安』之樂，美礼已成也。又有『房中祠樂』，高祖唐山夫人所作也。

とある。高祖の生前に既に宗廟は完成していただいだけでなく、使用していたのである。高廟とその他の帝王廟の間には舞踏の名にも区別があり、また、上述の「礼楽志」には「高廟奏『武德』・『文始』・『五行』之舞，孝文廟奏『昭德』・『文始』・『四時』・『五行』之舞。孝武廟奏『盛德』・『文始』・『四時』・『五行』之舞。」ともある。

高祖廟は漢代で最も重要な宗廟で、廟の規模は大きく設備も整っていた。上段に引用した

史料から、高祖廟には廟門・東廂及び楽人の演奏・歌舞を供する庭院があったことを知ることができる。『西漢会要』卷十二、宗廟に引く『漢旧儀』には、「高祖（廟）蓋地六頃三十畝四歩，祠内立九旗，堂下撞千石鐘十枚，声聞百里。」とある。高廟内にはまた亀室があった。これは帝王が兵を起し統率の将を任命する際の吉凶の判断を占う場所である。前漢長安城内より出土した瓦には「高廟万世」と銘があり、正しくこの瓦こそ高廟の遺物なのである。まさに高廟が宗廟の性質を兼ね備えていたので、前漢では一切の重要な国事はすべて高廟で挙行されたのである。文帝以降、皇帝即位の際はまず高廟に拝謁し、戴冠の儀礼も高廟で挙行された^[28]。諸侯王を冊封する時も、必ず祖廟内で冊命を頒布しなければならず^[29]、皇帝が改名する時も「奉太牢告祠高廟（太牢を奉じて告げて高廟を祠）」らなければならない^[30]。死後もまた高廟を祭祀しなければならない^[31]。王莽の時代、漢高廟を文祖廟としたが、王莽は帝位を篡奪した時も高廟内の金匱図冊を偽造した（その内容は「高帝承天命，以国伝新皇帝。」というもの）。新皇帝王莽の即位の時も、なお、高廟内で天命を授けられる必要があったのである^[32]。

王莽の地皇二年（21年）閏七月、王莽は長楽宮の五人の銅人が立ちあがったという夢を見たので非常に不愉快に思い、また、漢高祖廟に神霊が出現したと感じて、ここにおいて、「遣虎賁武士入高廟，拔劍四面提擊，斧壞戸牖，桃湯赭鞭洒屋壁，令輕車校尉居其中，又令中軍北壘居高寢。」と処置した^[33]。故に、後に後漢光武帝が長安城に到って宗廟・宮闕が廢墟と化したのを見て、都城を洛陽に移したのである。また十廟を高廟と合わせ十二室とした。太常卿一人、別に長安を治め、高廟事を管掌させた。後漢は太常卿を置いて長安の高廟の事務を管理させた以外は、さらに高守令を置いて宗廟を管理させた^[34]。また、前漢の時に高廟の管理をさせる官職として高廟僕射^[35]・高廟寢郎^[36]などが置かれた。

前漢の高祖十年（前197年）八月に長安城内に建てられた宗廟は長楽宮の北にあり、香室街南には太上皇廟が建てられ、恵帝廟は安門内にあった。文帝より以降、前漢の皇帝は長安城附近に廟を建てるのが無くなり、すべて陵の傍らに廟を建てた。王莽新朝の始建国五年（13年）二月、また文母皇太后（元帝皇后）のために廟を長安に立てた。

然るに、帝陵の傍らに廟を立てる制度は恵帝の時に始まった。恵帝は東宮に行き太后に朝見することは百姓の生活の妨げとなるので、復道（別名、閣道）を修築し両宮の間を接続した。丁度、この復道は高廟の道上にあり、復道を取り壊すことができないので、やむなく高祖のために原廟を設置した。そして、文帝より皇帝の生前に自らの廟を建立することが始まった。ただし、文帝霸陵の陵廟は生前に建てた「顧成廟」ではなく、景帝元年（前156年）に建立したものである^[37]。これによって、陵廟は宗廟が発展したものと知ることができる。『漢書』韋賢伝には「京師自高祖下至宣帝，与太上皇，悼皇考各自据陵旁立廟。」とある。陵

廟と宗廟の周囲はともに墻垣で囲われており、故に陵廟は「廟園」とも称される。廟園の四面に門を設置し、これを司馬門と言ひ、門外には双闕が設置された。「月祭於廟（月ごとに廟に祭る）」事とその他の祭祀活動を合わせると、年間の陵廟における祭祀は二十五回行われた。

古代の宗廟制度の多くは天子七廟・諸侯五廟・大夫三廟の制度を採用したが、前漢の高后は宗廟制度を議論することを禁止し、「今宗廟異処，昭穆不序」という混乱現象を生んだ。元帝の代になってようやく詔を下してこの事を討論させ、七廟か五廟かという異なる意見が提出された。元帝・成帝の時期に宗廟祭祀が揺れ動いて定まらなかった主な原因は、この時期、古代の廟制に対して異なる理解があったことであり、更に重要なことは帝王の五廟之制もしくは七廟之制であろうと、ともに当時の政治と関連性があり、王莽が新朝建国後に採用した九廟之制もこれと延長線上にあった。最終的に秦漢以来の宗廟の地を分かって立てるといふ形式を改変したが、これもまた周代の天子の廟制とも一定の連続性があった。この宗廟に関する一問題は複雑である。

前漢は高祖劉邦が皇帝を称し王莽が漢を篡奪するまで、全部で十一人の皇帝がいた。彼らの陵墓はすべて長安城附近にあり、その中の高祖長陵・恵帝安陵・景帝陽陵・武帝茂陵・昭

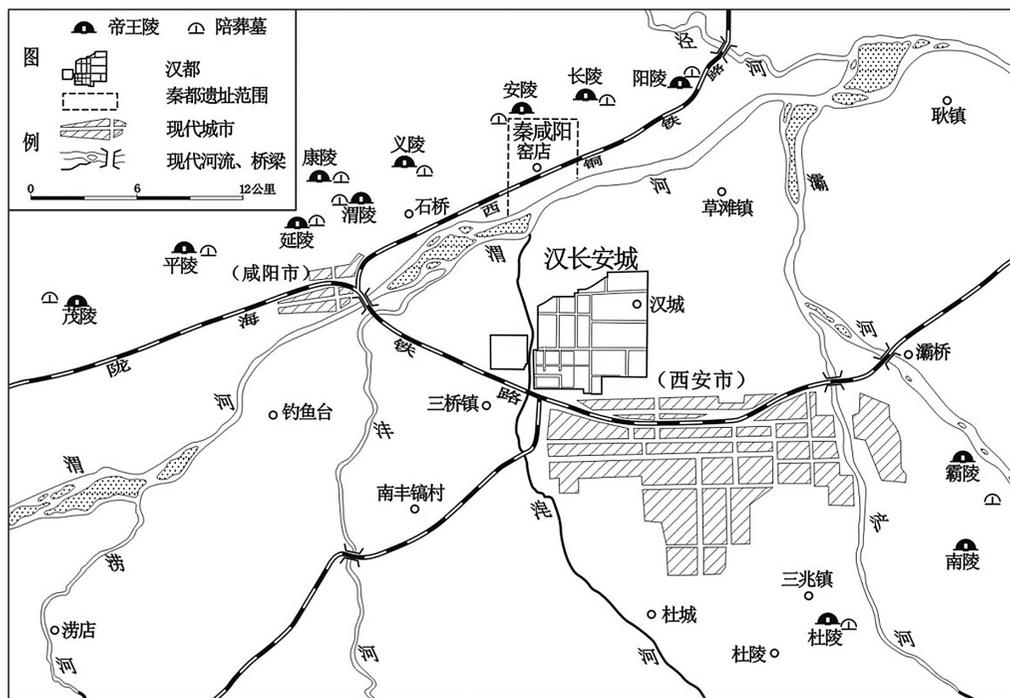


図3 前漢帝王陵分布図

(地図出典：何清谷『三輔黃圖校釈』図二十一，北京，中華書局，2006年，第444頁。孫建国作成)

帝平陵・元帝渭陵・成帝延陵・哀帝義陵と平帝康陵の九つの皇帝陵が渭河北岸の咸陽塬上に散在する。文帝霸陵と宣帝杜陵は、それぞれ長安城東南の白鹿塬と少陵塬（杜東塬）上にある（図3参照）。また渭北を帝陵の場所として選択したのは、道理をもって論じれば長樂宮を造営した時のはずであり、これもまた帝王在世中に自身の陵墓を造営するという秦の旧制を継承したことに由来する。

秦漢の帝王は一般的に皇帝即位の第二年目に自身の陵墓造営をすぐに開始し、人民を移住させて陵邑を建設した。元帝以前は帝陵を起こすごとに、間もなく帝陵の側に県を置き、県民を使役して陵園に奉仕させたが、これを「陵県」、あるいは「陵邑」とも称した。これらは陵園に奉仕させるために置いたものなのである。前漢一代、全部で陵邑が9つあった。高帝長陵邑・恵帝安陵邑・文帝灞陵邑・景帝陽陵邑・薄太后（文帝母）の南陵邑・武帝茂陵邑・趙婕妤（昭帝母）雲陵邑・昭帝平陵邑・宣帝杜陵邑である。2つの準陵邑があり、それは高帝が父の太上皇陵のために設置した万年県と、宣帝が父史皇孫陵のために設置した奉明県である。前漢の帝陵陵邑設置の主な目的は、第一は山陵に奉仕すること、第二は強幹弱枝の策をもって中央集権を強化することである。

（3）武庫・太倉及丞相府などの設置

武庫は丞相蕭何が建造したもので、当時の全国の武器製造と貯蔵の中心であった。漢代中央政府の武器庫は、前漢末年の戦火で破壊された。前漢洛陽城内にも武庫があった^[38]。長安城の武庫の建築開始は、先に分析した未央宮の建築開始年代と同じく漢高祖七年十月で^[39]、同年二月に完成した。高祖七年（前200年）の長樂宮の完成に引き続き武庫と未央宮は並行して建造されており、このことは武庫の重要性を説明できないわけがなく、このような重要な中央官署は未央宮の中に建てられたのにちがいないのである。加えて、武庫の地は丘隴の無い場所にあり、未央宮は秦の章台を基礎として企画建設された宮城であって、この武庫を置くべき平坦な地を宮中に組み込むことは正しく比較的妥当な計画である。そのほか、『資治通鑑』所引の『元和郡県志』によると、未央宮と長樂宮の間は相隔てること一里の距離である。この文献はやや新しいものであるけれども、軽々しくその正確性を否定することはできない。但し、目前の考古が踏査した資料より見れば、長樂宮西牆と未央宮東牆の間は相隔たること950mで、それは漢代の二里余に相当し、明らかに文献の記載と符合しないのである。それだけでなく考古発掘によって武庫が東西710、南北322mの長方形の大型の院落であったと証明されており、古人もまたこのような一つの大型建築物を目にして何もなしとはしない。このように武庫が未央宮内に置かれた可能性はとても高い。

高廟・武庫が未央宮内にあっただけでなく、丞相府・御史府もまた未央宮内にあった。劉

敦楨『大壮室筆記』両漢官署によると、「両漢官寺之在長安者，往往雜處宮中，尚書・少府・衛尉及光祿黃門無論矣，御史佐丞相總領天下，其府亦在宮内^[40]。」とある。

(4) 郡国邸の建造

前漢の律令によると，前漢時代の諸侯国は京師で邸宅を建てて，皇帝と朝見する際の宿泊地としていた。前漢200年間の諸侯国数の変化は大きくなく，筆者が統計したところによると，前漢初年（高祖が崩御した前195年）は10国で，前漢末年（成帝崩御の前7年）は19国であり，その期間で最多数なのは前漢景帝中六年（前144年）に梁孝王が死亡して梁を五分割した時で，諸侯国の合計は25となった。仮に各諸侯国がすべて国都に国邸を保有したとすれば，長安城内には20前後の国邸があったはずである。例えば文献に記載が見える，代王邸・斉王邸・昌邑邸・定陶邸・楚王邸など，文帝が正式に即位以前に住んだ代邸などである^[41]。恵帝の時，斉王劉肥は生命の安全を謀るために城陽郡を魯元公主に献上し，合わせて彼女を尊んで王太后とした。呂后は上機嫌となって斉王邸を訪問して置酒高会して歡を尽くし，斉王を開放して帰国させた^[42]。わずかに在位27日間の皇帝となった昌邑王は，廢位された直後は暫く昌邑邸に居住した^[43]。哀帝がまだ帝位を継承する前に郡国邸に留まり，成帝に朝夕伺候することを願ひ出た。哀帝の祖母傅太后は北宮に入居する以前は定陶邸内に居住していた^[44]。平帝の元始五年（5年），楚王邸を安漢公（王莽の爵位）の邸宅とし，大規模な修繕を行い，周衛（宮禁）と連結させた^[45]。

長安城内には諸侯国邸だけでなく，郡邸もあった。前漢時代は郡・国両制度が併存して実行されたが，諸侯王は定期的に天子に謁見し，大朝会に参加しなければならない規定があるだけでなく，その他多くの理由で国都と封国の間を往来しなければならなかった。故に京城内に国邸を保有することは，現代の中国における駐京弁事処を持つ意義と同様であった。諸侯国と併存していた郡も毎年国家に対して本郡の戸口・錢糧・税収，獄訟・治安などの状況を報告する義務を負う「上計」制度があり，郡邸は郡守と上計使が上京した際の宿舎であった。例えば，文帝は，河東太守の季布が非常に才覚があると聞き及び，長安に召し出して河東邸に一ヶ月間居住させた例がある。従って，もし郡ごとに国都の長安に郡邸を保有しているとすれば，その数量は非常に膨大なものとなり，表1のように整理できる。

上述の郡国邸と異なるものは，首都所在の京畿の地で，すなわち内史—左右内史—三輔は，同じく長安城内に治所を置いた。漢初の京畿官は内史と称され，景帝二年に分けて左・右内史を置き，主爵中尉（景帝中六年に都尉と改称）と合わせて三輔と総称した。武帝の太初元年に更に主爵都尉を名付けて右扶風（属官に掌畜令丞，また，右都水・鉄官・厩・雍厨四長丞などがある）とし，右内史を京兆尹（属官に長安市・厨両令丞，また，都水・鉄官両長丞

表 1 全国郡国数量変化表

時間	諸侯国都	漢郡治城	合計
前 202 年	7	21	28
前 195 年	10	15	25
前 180 年	14	15	29
前 164 年	17	23	40
前 153 年	19	44	62
前 144 年	25	43	67
前 87 年	19	87	106
前 74 年	17	87	104
前 49 年	16	88	104
前 7 年	19	84	103

資料出典：肖愛玲：『西漢城市体系的空間演化』表 2-8「西漢郡国城市数量変化表」，北京，商務印書館，2012 年 8 月，第 45 頁。

説明：本表は郡国の数量を統計したものであるが，郡国の治所ではない城市については，内容をやや調整してある。本表では景帝時代に左右内史を分置し，武帝時代に三輔の治所がともに長安城内に置いたので，郡国の数量と郡国の治所となった城市がやや多くなることを考慮している。

がある），左内史を左馮翊（属官に廩牲令丞尉，また，左都水・鉄官・雲臺・長安四市四長丞がある）とし^[46]，三輔の治所はすべて長安城中に置かれた。三輔の管理区域の区分は，渭城以西を右扶風とし，長安以東を京兆尹とし，長陵以北は左馮翊の所属とした^[47]（図 4 参照）。三輔は前漢で京畿地区を統治する三つの官職の総称であり，またその管轄区域を指して言う。三輔の管理職権は漢代の太守と同じではあるが^[48]，往々として郡国太守の中で治績が顕著な者のみ三輔の任に起用することができ（あるいは任用候補者の煩雑な事務を処理する能力を試した），任用者に能力があれば御史大夫・丞相などに昇進できた。例えば，宣帝の時代，韓延寿は東郡での治績が精彩であったので，上京して左馮翊となった。趙広漢は広漢太守より京兆尹に昇進した。張敞曾は山陽太守・膠東相を歴任したが，後に京兆尹に昇進し，治績は上げたが威儀が無いということで，長年にわたり京兆尹に留任した。翁帰は東海郡太守より右扶風に昇進したなどなど，この種の事例は枚挙にいとまがないのである。

京兆尹は城南の尚冠里に置かれた^[49]。馮翊は城内の太上皇廟西南にあり^[50]，太上皇廟は香室街の南にある^[51]，即ち清明門内大街の南である。扶風は夕陰街の北にある。夕陰街の位置に関してはいくつか異説がある。『長安志』巻五，宮室三によると「夕陰街在右扶風南，尚冠街在夕陰街之後。」とある。本稿では劉慶柱先生の観点，即ち「尚冠街応系進入未央宮の東西向街道，夕陰街為尚冠街之南的東西向街道」に賛同する。京兆尹と右扶風府の距離は比較的近い。

おおよそ，未央宮東部の官署分布の概略は次の通りである。武庫の位置は即ち秦の橐里子

墓の所在地であり、武庫の南の東西に走る街道が衣冠道街で、その南が高廟・高寝であり、高廟南の東西に走る街道が尚冠後街で、街南が尚冠里で、丞相府・中尉府（後に京兆府）は尚冠里にあった。その南を尚冠街とし、未央宮の東闕門と対応する街道である。街南は主爵都尉府（後の右扶風府）の所在地で、その南が夕陰街である。

(5) 市場・手工業

長安城内の市場の設置は長樂宮落成より早く^[52]、造営は長樂宮と同時進行で行われた。恵帝六年（前189年）にまた西市を設置した^[53]。わずかな文献の記載によると長安には九市があった。例えば『三輔黄図』に引く『廟記』には「長安市有九，各方二百六十步。六市在道西，三市在道東。凡四里為一市，致九州之人在突門。挾横橋大道，市楼皆重屋^[54]。」とある。『西都賦』には「九市開場，貨別隧分」とあり、『西京賦』には「爾乃廓開九市，通關帶關。旗亭五重，俯察百隧。」とある。三者に記載される市場の数は一致している。但し、何と言っても九つの市がどれに該当するかについては諸説あり、一致した結論が導き出せない。

長安城内には上述の有名な市場以外には、少ないが違法な市場もあり、武帝の天漢年間（前100-前97年）、北軍壘垣内には買区があり、「以求賈利，私売買以与士市。」と記録されている^[55]。長安の東市内には占卜専門の市場があり、かつて司馬季主は長安東市で占卜を生業としていたが、市場内に卜肆を構えていた^[56]。

20世紀80年代の後期、漢長安城遺址の西北部に文献に記載されていた「東市」と「西市」の遺址が発見された。二つの市の外周に版築された「市牆」があり、市内には各々東西・南北に走る二条の道路があり、四条の路は互いに交差して「井」字形を形成し、全市を貫通していた。西市の範囲内および周辺からは大量の陶窯が分布していた。西市内からは既に発掘された21座の陶窯があり、裸体陶俑を専門に焼成するもので、陶俑は景帝陽陵の陪葬坑より出土した陶俑の型式と完全に一致している。正しく少府に所属する東園の職人の官營窯の址である。西市西側6座の陶窯の分布は散在しており、磚瓦と日用器皿を焼造したが、陶俑もあり、或いは民營の性質を持つ陶窯なのかもしれない^[57]。このほか、2ヶ所の冶鑄遺址も発見され、1ヶ所からは大量の鑄範が出土し、別の1ヶ所からは烘烤疊鑄範の窯址と冶鑄煉炉および廢料堆積坑が発見された^[58]。東市は主に商業活動に従事し、そして西市は主として手工業区として利用されたに違いなからう^[59]。

城西北角の六村堡・相家巷一帯より、焼造陶俑と鑄鉄の作坊遺址が発見された。未央宮北の石渠閣遺址、城東閭新村附近の離宮遺址、城西建章宮範囲内の好漢廟・窩頭寨、城東南の老君殿・棗園村、昆明池南滄浪河畔の西趙村、城東清明門外などの場所からは、すべて漢代

の鑄銭作坊の遺址が発見された。直城門附近からは製造兵器の陶範が出土した。城西南角墻外の約 300 m の場所からは銅錠 10 個が出土した。それらの考古学的成果と長安の宮室建造・貨幣鑄造は緊密な関係にあったのである。

（6）太学・明堂・辟雍

社会が安定し、百姓安居して業を楽しめば、文化は隆盛に向かう。武帝の建元五年（前 136 年）に『五経』博士を設置し、元光元年（前 134 年）五月、賢良に詔勅が下され、董仲舒・公孫弘らが徴召された。元朔五年（前 124 年）夏六月に、博士のために弟子の定員を定め、学者群を拡充させたうえで、長安に太学を設立した。「置明師、以養天下之士（明師を置き、以て天下の士を養った）」のである^[60]。しかしながらこの時の太学規模は比較的小さく、何人かの五経博士と 50 人の博士弟子がいるだけであったが、昭帝時代に 100 余人まで増加し、宣帝時代に 200 人にまで増加し、成帝の時期に、太学は大規模な発展を遂げ、ついに 3000 人にまで定員が拡充された。元始四年（4 年）の王莽の時には太学校舎を増築した。

武帝が即位すると「議古立明堂城南（古を議して明堂を城南に立てた）。」後に竇太后の阻止によって「諸所興為皆廢（諸所興す所は為に皆廢せしむ）。」となった。武帝は元封二年（前 109 年）に泰山の膝元の奉高県に明堂を修建した。平帝の元始四年（4 年）になって、安漢公の王莽は明堂・辟雍を立てさせた^[61]。また、同五年（5 年）正月になり「禘祭明堂、諸侯王二十八人・列侯百二十人・宗室子九百余人、徴助祭（明堂に禘祭し、諸侯王二十八人・列侯百二十人・宗室子九百余人をして、徴して助祭せしめた）。」故に、前漢末年に明堂・辟雍が同時に南郊で完成した。

（7）上林苑・漕渠と渭北灌区

秦上林苑は渭河以南にあり^[62]、高祖は漢二年（前 205 年）十一月に、秦の苑囿園池を開放して百姓をして耕作できるようにした。武帝の建元三年（前 138 年）に接収して宮苑とし、また上林苑と名付けて、大規模な拡張工事を進めた。拡張後の宮苑は、規模雄大で宮室も数多あった。上林苑の東南は宜春・鼎湖（ともに宮名、今の藍田県焦岱鎮）・昆吾（今の藍田県東北）にまで及び、南は御宿（今の長安県南）から終南山にまで至り、西南は長楊・五柞（今の周至県の東南）にまで及び、北に向かって渭河が貫き、西方は黄山宮（今の興平県馬嵬鎮の北）を巡って、渭水が東流するのを臨み、北は池陽に及んだ^[63]。元狩三年（前 120 年）、武帝は水軍を訓練するために、上林苑内に昆明池を掘った。武帝元鼎二年（前 115 年）に、水衡都尉に上林苑を管理させ、令・丞・左右尉などの官職を置いた。宣帝の神爵三年（前 59 年）十二月、鳳皇が上林に集まったので、鳳凰殿を造営した^[64]。

武帝元光六年（前129年）春，大農令鄭當時の建議のもとに，渭水の南岸に沿って都城長安より黄河に直通する人工の運河を開いた。『漢書』卷二十九，溝洫志第九によると，元鼎六年（前111年），左内史兒寛の提唱のもとに，六輔渠を穿鑿させて「以益溉鄭国傍高印之田（以て鄭国に溉ぐ傍の高印の田を益す）」^[65]。とある。また，同じく溝洫志には，太始二年（前95年）に趙の中大夫白公の建議を受けて，「引涇水，首起谷口，尾入櫟陽，注渭中，袤二百里，溉田四千五百余頃（涇水を引き，首は谷口より起こし，尾は櫟陽に入り，渭中に注がしむ，袤二百里，溉田四千五百余頃なり）」とある（図4参照）^[66]。

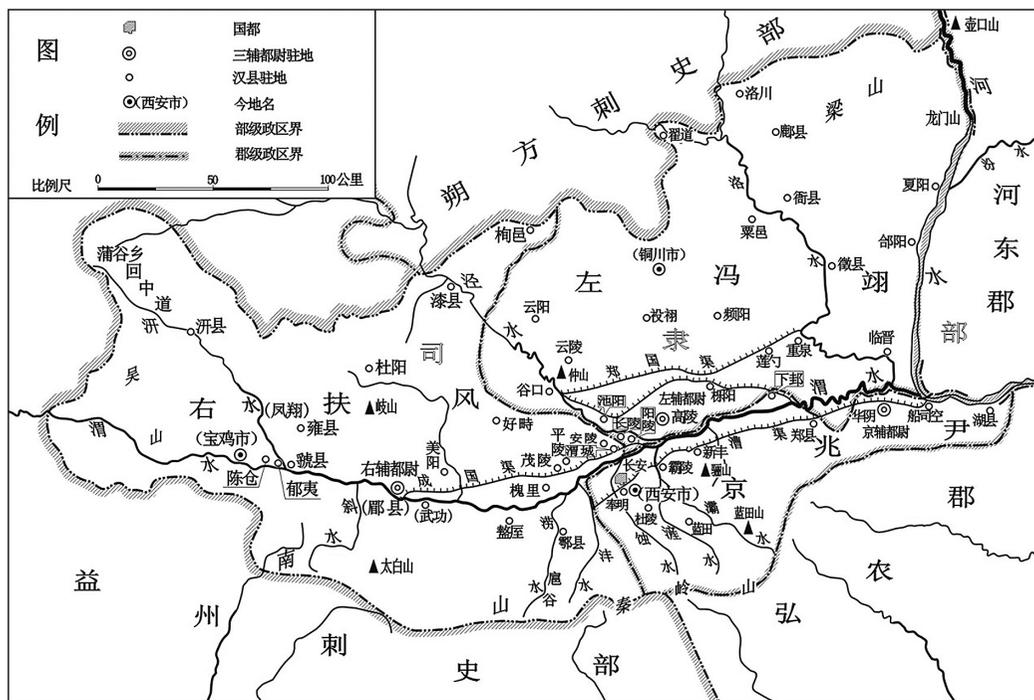


図4 三輔形勢図

(地図出典：何清谷『三輔黄图校釈』図二十一，北京，中華書局，2006年，第444頁。孫建国作成)

(三) 長安城城壁の修建

漢代長安城の建築は，高祖崩御後の恵帝劉盈の時に完成した。『漢書』恵帝紀によると，恵帝元年（前194年）春正月，長安を造営した。三年（前192年）春，長安六百里内の男女十四万六千人を徴発して長安城を築き，三十日で乃ち罷めた。三年（前192年）六月，諸侯王・列侯をして奴隸二万人を徴発して長安城を築かせた。五年（前190年）春正月，再び長安六百里内の男女十四万五千人を徴発して長安城を築き，三十日して罷めた。五年（前190

年）九月，長安城は完成した。

長安城が完成した時間は、『史記』呂太后本紀及び『漢書』地理志はともに恵帝六年としているが、『漢書』恵帝紀、『漢書』五行志は五年としている。実のところ，双方の差は大きくはなく，城が五年に完成したという者は，五年九月に完成したとする。これは同年の年末である。そして，六年に完成したとする者は，同年十月に完成したとする。これは六年の年頭である。且つ漢代の制度では，毎年の年頭に諸侯たちは朝賀のために京師に上る必要があり，この機会を借りて長安郭城の竣工を慶祝したと思われる。この一点から言えば，史官が長安城の完成時期を六年年頭とする事は不可とされないのである。

『史記』呂太后本紀の『索隱』に引く『漢宮闕疏』に「四年，築東面。五年築北面。」とあるのと、『漢書』恵帝紀の鄭氏注の「三年，城一面，故速罷。」とある記載を結合させると，長安城城壁の建築順序は，まず，西北方より始まり，次いで西南方，次いで南面，次いで東面，最後に北面に着手した。つまり，西北方より城壁の建築に着手し，尋いで南行左折して東に向かう順序で増築し，最後に完成した。

4. 前漢都城空間の形成メカニズムの簡単な分析

本論で整理したところによると，前漢長安の都城空間の変化は以下のいくつかの方面で体现されている。

- 1) 都城空間の位置の変遷。
- 2) 高祖の時代に完成した長樂宮・未央宮及びその他の宮城の出現。
- 3) 都城の城壁の無より有にいたる改変。
- 4) 宗廟空間の城内より皇帝陵周辺への移転，陵邑制度の興廃及び宗廟制度をめぐる議論。
- 5) 前漢の天地を祭祀する儀礼空間は，雍城より甘泉宮へ，汾陰より長安城南北郊外へと，両地点の間の移転を繰り返したこと。
- 6) 前漢末の南郊礼制建築の修築等。

200余年の建設を経て，都城の特色文化区は逐次形成されていった。城内には宮殿区・官署区・郡国邸・甲第・一般民衆区と工商業区があった。郊外には，南郊の礼制と休閒文化区・北郊帝陵文化区・祭祀文化区・農業灌区があり，東郊には市民の墓葬区があった。

都城空間の変化について上述した特徴は，以下のことを表している。

- 1) 漢高祖の時期に大都城空間の基本形態が打ち立てられた。
- 2) 恵帝の時期は都城周辺の地形と社会環境の影響を受けて，安全性のために都城の具

体的空間の境界を定めた。しかしながら、城壁の具体的効果については考える余地がある。

- 3) 武帝の時期に恵帝の城壁の束縛より逃れ、城郊へと不断に拡張発展し、強盛王朝としての都の宏大な気魄を形成した。
- 4) 元帝・成帝時期の文化の繁栄と都城空間の変化は、密接な関係があった。
- 5) 哀帝から平帝期にかけては、今古文の経学の影響下で都城空間が形成された。

秦漢時期の社会・政治・文化の影響を受けた前漢長安城の空間変化の根本的原因の一つは前漢朝廷の安定と秩序化であり、この一つの前提の下の都城空間は以下の点が反映されている。

- 1) 秦代都城空間制度の継承と創造。
- 2) 伝統文化の新解釈、今古文による経学の解釈—廟制・明堂形制をめぐる議論。
- 3) 法天・五行思想。
- 4) 因地制宜（訳者注、その土地に応じた制度を定めること）の思想。
- 5) 儒家と法家を結合した実用主義思想。

前漢長安城の空間変遷の過程は前漢の社会思想意識の発展と変化から社会階層の流動を直接体现しており（特に前漢中期後期の礼制建築の空間変化に表現されている）、都城空間の理性モードは逐次形成され、「匠人营国」（訳者注、『周礼』に見える理想的な都城制度）的モードは徐々に完備され、後世の都城モードが追求すべき模範となった。中国古代都城空間は突出した文化象徴の意義を備えており、空間形式及び内容の改変は社会・政治・文化意識等、変化の直観的表現であった。本文では前漢都城空間の形成過程と空間形態の整理を経て、長安城空間の変化と構造と特徴への影響を分析した。しかしながら、前漢長安城における都市空間の形成と社会管理間の動態関係を明らかにする本研究の目的を未だ達成しておらず、本稿は一種の試論の範疇を出ない、見識ある学者たちの批評と指正を希望するものである。

注

- [1] 李久昌『国家、空間与社会—古代洛陽都城空間演變研究』、三秦出版社、2007年。
- [2] 魯西奇「空間与權力：中国古代城市形態与空間結構的政治文化內涵」、《江漢論壇》2009年第4期、第81-88頁。
- [3] 肖愛玲『西漢城市地理研究』、陝西師範大学2006年博士学位論文、2012年8月に『西漢城市体系的空間演化』と改めて、商務印書館より正式に出版した。
- [4] 李開元『漢帝國的建立与劉邦集团—軍功受益階層研究』、生活・読書・新知三聯書店、2000年3月、第1版、第59頁。
- [5] 『史記』卷八、高祖本紀第八、「高祖是日駕、入都関中。」中華書局、1982年第2版、第281頁。『漢書』卷一下、高帝紀下、「是日、車駕西都長安。」中華書局、1962年版、第58頁。

- [6] 『史記』卷八，高祖本紀第八，中華書局，1982年第2版，第281頁。
- [7] 秦昭王の興樂宮を指し，秦始皇二十六年の渭南諸宮・章台・上林，二十七年の渭南信宮（後の秦始皇の極廟）である。
- [8] （唐）佚名撰，（清）張澍輯，陳曉傑注『三輔旧事』（三秦出版社，2006年，第8頁）には「秦於渭南有興樂宮，渭北有咸陽宮，秦昭王欲通二宮之間，造橫橋三百八十步」とある。
- [9] 『漢書』卷二十五下，郊祀志第五下，中華書局，1962年版，第1269頁。
- [10] 『漢書』卷二十五下，郊祀志第五下，中華書局，1962年版，第1253-1254頁。
- [11] 『漢書』卷二十五下，郊祀志第五下，「有司增雍五時路車各一乘。駕被具，西時・畦時寓車各一乘，寓馬四匹，駕被具。」中華書局，1962年版，第1212頁。
- [12] 『漢書』卷二十五上，郊祀志第十五上には「渭陽五帝廟」とあり，「同宇，帝一殿，面五門，各如其帝色。祠所用及儀亦如雍五時。」とある。中華書局，1962年版，第1213頁。同じく郊祀志には「五帝廟臨渭，其北穿蒲池溝水。」とある。漢文帝の「渭陽五帝廟」は景帝時代に改修されて陽陵の陵廟となった。焦南峰「宗廟道，游道，衣冠道—西漢帝陵道路再探」，『文物』2010年第1期，第73-77頁を参照。
- [13] 『漢書』卷二十五上，郊祀志第十五上，（文帝十五年）に「文帝出長門，若見五人於道北，遂因其直立五帝壇，祠以五牢。」とある。中華書局，1962年版，第1214頁。
- [14] 『史記』卷十二，孝武本紀第十二，中華書局，1982年第2版，第456頁。
- [15] 『漢書』卷二十五下，郊祀志第五下，中華書局，1962年版，第1266頁。
- [16] 『漢書』卷九十九上，王莽傳第六十九上には「居攝元年正月，莽祀上帝於南郊，迎春於東郊，行大射礼於明堂，養三老五更，成礼而去。」とある。中華書局，1962年版，第4082頁。
- [17] 『漢書』卷二十五下，郊祀志第五下，中華書局，1962年版，第1268頁。
- [18] 『漢書』卷七十五，睦兩夏侯京翼李傳第四十五，翼奉傳，中華書局，1962年版，第3175頁。
- [19] 『漢書』卷六，武帝紀第六，中華書局，1962年版，第182頁。
- [20] 『史記』卷十二，孝武本紀第十二，『索隱』に引く『三輔故事』には「建章宮承露盤高三十丈，大七圍，以銅為之。上有仙人掌承露，和玉屑飲之。」とある。中華書局，1982年第2版，第459頁。
- [21] 『漢書』卷九十三，佞幸伝第六十三，董賢に「召賢女弟以為昭儀，位次皇后，更名其舍為椒風，以配椒房云。」とある。中華書局，1962年版，第3733頁。
- [22] 『三輔黄図』は「北宮」について，「周回十里。高帝時制度草創，孝武增修之，中有前殿，廣五十步，珠帘玉戸如桂宮。」とある。何清谷校釈，中華書局，2005年，第136頁。
- [23] 『漢書』卷二十五上，郊祀志第五上には，「又置壽宮北宮，張羽旗，設共具以礼神君。」とあり，臣瓚の注には「壽宮。奉神之宮也。」とある。中華書局，1962年版，第1220頁。
- [24] 陳直校証『三輔黄図』には，「漢未央・長樂・甘泉宮・四面皆有公車。建章・甘泉・各有衛尉，故亦皆設公車司馬之官。」とある。陝西人民出版社，1980年，第50頁。
- [25] 『史記』卷九十九，劉敬叔孫通列傳第三十九，叔孫通伝には，「孝惠帝為東朝長樂宮，及間往，數蹕煩人，乃作復道，方築武庫南。叔孫生奏事，因請問曰『陛下何自築復道高寢，衣冠月出游高廟。高廟・漢太祖，奈何令後世子孫乘宗廟道上行哉。』」とある。『集解』で韋昭は「閣道也。」と述べ，如淳は「作復道，方始築武庫南。」と述べる。応劭は「月出高帝衣冠，備法駕，名曰游衣冠。」と述べ，如淳は『三輔黄図』，高寢在高廟西，高祖衣冠藏在高寢。」と述べており，また，「月出游於高廟，其道值所作復道下，故言乘宗廟道上行」とある（中華書局，1982年第2版，第2725-2726頁）。『漢書』卷四十三，酈陸硃劉叔孫伝第十三，叔孫通伝には，「惠帝為東朝長樂宮，及間往，數蹕煩民，作復道，方築武庫南，通奏事，因請問，曰『陛下何自築復道高帝寢，衣冠月出游高廟。子孫奈何乘宗廟道上行哉。』」（中華書局，1962年版，第2130頁）とあり，両書の記

載はほぼ同じである。

- [26] 『漢書』卷十六，高惠高后文功臣表第四，中華書局，1962年版，第527頁。
- [27] 『漢書』卷十六，高惠高后文功臣表第四，中華書局，1962年版，第528頁。
- [28] 『漢書』卷七，昭帝紀第七，中華書局，1962年版，第217頁。
- [29] 『漢書』卷六，武帝紀第六，武帝元狩六年夏四月乙巳の条には、「廟立皇子闕為齊王，且為燕王，胥為広陵王。」とある。中華書局，1962年版，第179頁。
- [30] 『漢書』卷十二，平帝紀第十二，中華書局，1962年版，第352頁。
- [31] 『漢書』卷四，文帝紀第四，文帝后元七年の条には、「夏六月己亥，崩于未央宮，遺詔曰『……朕獲保宗廟，以眇眇之身托于天下君王之上，二十有余年矣。……今乃幸以天年得復供養于高廟，朕之不明与嘉之，其奚哀念之有。』」（中華書局，1962年第2版，第131-132頁）とある。
- [32] 『漢書』卷九十九中，王莽伝第六十九中，中華書局，1962年版，第4108，4113頁。
- [33] 『漢書』卷九十九下，王莽伝第六十九下，中華書局，1962年版，第4169頁。
- [34] 『後漢書』，志第二十五，百官志には、「高守令一人，六百石，掌守廟。」とある。
- [35] 『漢書』卷九十九上，王莽伝上第六十九上。中華書局，1962年版，第4095頁。
- [36] 『漢書』卷六十六，車千秋伝，中華書局，1962年版，第2883頁。
- [37] 中国社会科学院考古研究所『漢杜陵園遺址』，科学出版社，1993年，第106頁。
- [38] 『漢書』卷四十，張陳王周伝第十，中華書局，1982年第2版，第2059頁。
- [39] 薛季宣「未央宮記」によると、「丞相鄼侯臣何，昧死再拜，言皇帝陛下『陛下從天下義兵，誅亡道秦，西都関中，以根本制枝葉，天下幸甚。京師，諸夏之父母也，要令四方諸侯，知有所法。今咸陽遭項氏殘滅之后，堂殿泯毀，櫟陽，興樂承秦故，雖靡蔽一時之制，非法度之宮也。臣不勝大願，昧死請陛下，詔有司度長安地，作天子之宮曰未央，為漢家建万世無窮之業。臣何昧死再拜以聞。』制曰『可。』尚書令下御史將作，按地圖以詔書從事，丞相裁處其宜，太卜筮并吉。七年，初作宮長安，因龍首山以抗前殿……其二月，上自平城至，見長安宮室壯麗……。」とある。辛德勇「薛季宣「未央宮記」与漢長安城未央宮」より引用，同論文は妹尾達彦編『都市と環境の歴史学』第4集，株式会社理想社，2009年3月10日，第299-300頁に収録。
- [40] 劉敦楨『劉敦楨文集』，北京，中国建築工業出版社，1982年11月，第139頁。
- [41] 『漢書』卷四，文帝紀第四，中華書局，1962年版，第108頁。
- [42] 『史記』卷九，呂太后本紀第九に引く『正義』には「漢法，諸侯各起邸第於京師。」とある。中華書局，1982年第2版，第398-399頁。
- [43] 『漢書』卷六十八，霍光金日磾伝第三十八，霍光伝，中華書局，1962年版，第2946頁。
- [44] 『漢書』卷八十一，匡張孔馬伝第五十一，孔光伝，中華書局，1962年版，第3356頁。
- [45] 『漢書』卷九十九上，王莽伝第六十九上，中華書局，1962年版，第4075頁。
- [46] 漢代より首都所在の郡級長官を尹と称しており，後世もこれに因み，明清の順天府・民国初年の京兆尹にいたるまで継承された。譚其驥「漢書・地理志校釈」，『中国古代地理名著選読』第一輯，科学出版社，1959年を参照。
- [47] 『太平御覽』卷百六四所引の『三輔黄図』を参照。何清谷先生はこの条文を北宋期に流传した別の一版本の『三輔黄図』よりの引用と推測しており，現行本『三輔黄図』と比べて字句が明瞭に残されている。
- [48] 張宗祥は胡広『漢官解詁』を按じて「三輔典境理人，与守職同，而俱在長安城中。」と述べる。
- [49] 漢宣帝は即位する前に尚冠里に居住していた。『漢書』卷八，宣帝紀第八には、「宗正德至曾孫尚冠里舍・洗沐・賜御府衣。」とある。中華書局，1962年版，第238頁。
- [50] 『史記』卷一百一，袁盎晁錯列伝第四十一，晁錯伝には、「内史府居太上廟墼中，門東出，不便，錯乃穿兩門南出，鑿廟墼垣。」とある。中華書局，1982年第2版，第2746頁。

- [51] 『長安志』卷五，宮室三に引く『三輔黃圖』には「太上皇廟在長安城中香室街酒池之北。」とある。
- [52] 『史記』卷二十二，漢興以來將相名臣年表第十には，高祖六年（前200年）に長安城に「大市」を設け，長樂宮は同七年に完成した，と記載されている。中華書局，1982年第2版，第1120頁。
- [53] 『漢書』卷二，惠帝紀第二，中華書局，1962年版，第91頁。
- [54] 何清谷校釈『三輔黃圖』，中華書局，2005年，第93頁。
- [55] 『漢書』卷六十七，楊胡朱梅云伝第三十七，胡建伝，中華書局，1962年版，第2910頁。
- [56] 『史記』卷一百二十七，日者列伝第六十七には，中大夫宋忠と博士賈誼の休暇中のこととして，「同輿而之市，游於卜肆中。」とある。折しも雨が降った後で人が行き交うことが稀であったので，卜者を見つけるのは甚だ容易であった。また，「司馬季主間坐，弟子三四人侍，方辯天地之道，日月之運，陰陽吉凶之本。」と記す。中華書局，1982年第2版，第3215-3216頁。
- [57] 中国社会科学院考古研究所漢城考古隊「漢長安城窯址発掘報告」，『考古学報』1994年第1期，第99-129頁，「漢長安城23-27号窯址発掘報告」，『考古』1994年第11期，第986-996頁。
- [58] 中国社会科学院考古研究所漢城考古隊「1992年漢長安城冶鑄遺址発掘簡報」，『考古』1995年第9期，第792-807頁。
- [59] 李毓芳「漢長安城の手工業遺址」，『文博』1996年第4期，第44-47頁。
- [60] 『漢書』卷五十六，董仲舒伝第二十六，中華書局，1962年版，第2512頁。
- [61] 『漢書』卷九十九上，王莽伝上第六十九上にも「是歲，莽奏起明堂・辟雍・靈台，為學者築舍万区，作市・常滿倉，制度甚盛。」とある。中華書局，1962年版，第4069頁。
- [62] 『史記』卷六，秦始皇本紀第六，秦始皇二十六年，「諸廟及章台・上林皆在渭南。」中華書局，1982年第2版，第239頁。
- [63] 『漢書』卷六十五，東方朔伝第三十五，中華書局，1962年版，第2867頁。
- [64] 『漢書』卷二十五下，郊祀志第五下，中華書局，1962年版，第1252頁。
- [65] 『漢書』卷二十九，溝洫志第九，中華書局，1962年版，第1685頁。
- [66] 『漢書』卷二十九，溝洫志第九，中華書局，1962年版，第1685頁。

（ショウ アイレイ 陝西師範大学西北歴史環境与経済社会発展研究院）
（ほりい ひろゆき 学習院大学国際研究教育機構 RA）